

## 日本におけるカスパル・シャムベルゲルの活動について

### ヴォルフガング・ミヒエル

ドイツ・ライプチヒ出身の外科医カスパル・シャムベルゲル (Caspar Schamberger、一六三三—一七〇六年) が二度江戸に滞在し、患者の治療に当たり、大目付井上筑後守政重の興味を引いたことは周知のことである。しかし、彼の活動の様子を明らかにするためには、これまで唯一の手がかりとされてきた出島商館の日誌以外の文献を調査しなければならない。<sup>(1)</sup>

シャムベルゲルは新蘭館長アントニオ・ブロウクホルスト (Antonio Brouckhorst) と共に一六四九年八月七日には出島に到着しており、一月五日の着任を待つ間にも周囲の注目を多少とも集めていたようである。一月七日には通詞の猪股傳兵衛と名村八左衛門が、剃髪した男四人を伴って商館長室に現われ、長崎奉行馬場三郎左衛門から、直ちに外科の授業をおこなうよう依頼された由伝えた。ブロウクホルストは奉行の依頼の真意に些か疑いを抱きながらも、当人たちを、商館の「メーステル」に紹介した。<sup>(2)</sup> 一七世紀のそれに類する依頼の取扱いの例を考えると、恐らく二、三日の内にシャムベルゲルによる外科術の授業が始まったものと思われる。しかし、それにしても、九月一九日に来日した特使アンドリース・フリシウス (Andries Frisius) と商館長ブロウクホルストの使節団が一月二五日にはすでに江戸へ出立したこともあって、この授業は長くは続かなかつたであろう。シャムベルゲルはこの四人との出会いを一種の試験の

ようなものとして考えていたふしがある。一七〇六年、ゼーリヒマン牧師がライプチヒで故シャムベルゲルの生涯について紹介しているが、その際、牧師は、シャムベルゲルは「日本人医師四人からその職業上の能力を試され、その外科学は十分なものであると認められた」と述べている。<sup>(3)</sup>

オランダの使節団は、一二月三一日に江戸に到着している。三週間後には長崎奉行馬場三郎左衛門から、臼砲手、伍長、外科医と一人の商務官は使節団が長崎へ帰った後もしばらく江戸に残るよう伝えられた。<sup>(4)</sup> 使節団が江戸を発つまでの出来事はプロウクホルストの商館日誌とフリシウスの旅行日誌に記載されている。<sup>(5)</sup> 身分の低いシャムベルゲルについてはこの日誌ではほとんど触れられていないが、プロウクホルストは一六五〇年二月六日、將軍の「書記官」が肩を傷めたといつてやって来たたと記している。<sup>(6)</sup> フリシウスによれば、これは長崎奉行馬場の書記官で、腕を負傷していたといふ。<sup>(7)</sup> いずれにせよ、この患者の社会的な地位のお陰で、これがシャムベルゲルの江戸での医療活動を示す最初の記述となったのである。

### 稲葉美濃守正則の治療

四日後の夕方、小田原城主稲葉美濃守正則が腕の診察のためシャムベルゲルを屋敷へ呼んだ。驚くべきことに、宗田一氏が一九七八年に紹介した「阿蘭陀外科医方秘伝」<sup>(8)</sup> にこの治療の詳細な処方が残っている。

「稲葉美濃守殿 筋痛ノ時療治

一 フラリヨテレメンテイナ (Oleum Terebintinae)

一 フラリヨロウリイニ (Oleum Laurini)

一 フラリヨカリヨヒリロウレン (Oleum Caryophylli)

一 フラリヨホツス<sup>(9)</sup> (Oleum Vulpinum)

一 フラリヨヘイダラ (Oleum Petrae)

一 フラリヨカモメリ (Oleum Chamomillae)

右合温テ塗付テ良。<sup>(10)</sup>

またシヤムベルゲルはアルテア硬膏も用いている。これについてドイツにはブランデンブルク、ニュルンベルクなどの処方があつたが、いずれも最初の三色が基になっている。下記のような処方はおランダの薬局方にもないので、江戸では材料がそろわず、代用のものを用いていたかも知れない。

「インクエントデアルデイヤ

一 シミラネ 草ノ実 (Semen Lini)

一 ヘネゲレテセ 同 (Semen Foenugraeci)

一 ラアデキスサルデイ 葵ノ根 (Radix Althaeae)

一 アラグゾニホツチイネ (Axungia Porci)

一 新キホツト<sup>(11)</sup> (Butyrum)

一 ゴメベテレイネ 木ノ脂 (Gummi Bdellium)

一 ゴメアモニヤクン 同 (Gummi Ammoniacum)

一 セイラ 加減 (Cera)

各煉合筋和ケ堅リヲ解ナリ。<sup>(12)</sup>

稲葉はこの治療に大変感銘を受けたらしく、一六六〇年代に至るまで医療品をたくさん注文し、侍医をオランダ人外科医のもとで学ばせている。彼の江戸屋敷での侍医、吉永升庵の名は「阿蘭陀加須波留方」のひとつに添えられた短い

「外科名寄 阿蘭陀流」に見られる。

「一 直伝 吉永升庵 相州稲葉美濃守殿御抱在江戸

子 吉永升選 阿蘭陀二付テ筑前二下向」<sup>(13)</sup>

升庵はオランダ人からヤン・シユラム (Jan Schram) と呼ばれ、一六五〇年に記録を作成したか、又は猪股傳兵衛か他の通詞の資料を江戸で手に入れるかしたようである。彼は息子と同様、後にシヤムベルゲルの後任者のもとで西洋の外科学をかなり集中的に学んでいる。

シヤムベルゲルが稲葉を治療してから急に忙しくなったことは、フリシウスの使節団の金銭出納簿の記録からもうかがえる。そこには二月一三日に駕籠を二台購入したことが記されている。この駕籠は、筑後殿の命を受けたシヤムベルゲルと通詞を毎日あちこちの通りへ運び、治療を行うのに用いられた。さらに、シヤムベルゲルは「さまざま必需品」を購入している。<sup>(15)</sup>

### 水戸中納言の小姓の療治

ブロウクホルストの日記には記されていないが、また別の患者に、水戸中納言徳川頼房に仕えていた小姓がいた。「阿蘭陀外科医方秘伝」によると、その小姓のひとりが、足に傷を負ったことが記されている。

「水戸中納言様 小姓足ノ療治

- |   |              |             |                        |
|---|--------------|-------------|------------------------|
| 一 | ヲヲリヨアネテイネ    | 少ウン、イノント、痛止 | (Oleum Anethi)         |
| 一 | ヲヲリヨカモメリ     | 熱、ノギク、筋ノタメ  | (Oleum Chamomillae)    |
| 一 | ヲヲリヨロウリイニ    | 同、ヒクタン、同    | (Oleum Laurinum)       |
| 一 | ヲヲリヨカリヨヒロウレン | 同、丁子ノ事、同    | (Oleum Caryophyllorum) |
- 右四色ハサジ一ツ宛

一 ヲヲリヨテレメンテイナ 大熱、筋ノタメ (Oleum Therebintinae)

一 ヲヲリヨスクシイネ 同、同 (Oleum Succini)

一 ヲヲリヨヘイダラ 同、湿気去 (Oleum Petrae)

一 ヲヲリヨエネペレ 同、筋ノ為 (Oleum Juniperi)

右四色ハ四滴程宛

右八色合温テヌリ付其上ニ付ル膏薬ワ

メリロウト、サダレノン、ムスラキニブス、ヲリスゴ<sup>(16)</sup>ロ<sup>(17)</sup>ニ<sup>(1)</sup>

おそらくシヤムベルゲルは個々の油について、その効用を説明しようとしていたのであろう。中には代用になる植物の日本名を書いたものもある。

### 大目付井上政重の侍医の治療

井上筑後守政重のもとにいた通詞の新右衛門<sup>(18)</sup>はポルトガル語が上手でシヤムベルゲルともよく接触していた。膀胱結石やカタル、その他の病に苦しむ高齢の井上<sup>(19)</sup>を診ていたのは、これまでの研究で見落とされていた侍医のトーサク (Tosacko) であつた。<sup>(20)</sup>

大目付の侍医という地位のお陰で彼は誰よりも外国の医薬品や医療器具についてよく知っていた。苦痛を訴える主人が最高の治療を期待していたので、彼は西洋医術を熱心に学んでいたに違いない。このトーサクも一六五〇年にシヤムベルゲルの治療を受けている。

「井上筑後守様 坊主衆療治

ヲヲリト云ハ油ナリ

一 ラフリヨホツス (Oleum Vulpinum)

一 ラフリヨテレメンテイナ (Oleum Terebinthinae)

一 ラフリヨロウリイニ (Oleum Laurinum)

一 インクエントデアルデイヤ (Unguentum de Althaea)

右合ヌリ付其上ニムスラギニフスヲ付ルナリ<sup>(21)</sup>

トーサクは、シャムベルゲルが井上の屋敷で医薬品や治療法について説明をするときには常に同席していたと思われる。シャムベルゲルが一六五一年一月に日本を離れてまもなく、一六五二年二月にトーサクは様々な医薬品を注文しており、これを見ても、トーサクが相当の知識を持っていたことが感じられる<sup>(22)</sup>。間違いなく、井上の侍医トーサクは数少ないシャムベルゲルの「弟子」のひとりだったと考えるとよいであろう。翌一六五三年一月になると、彼は出島蘭館医が始めた謡曲師喜多村七大夫の治療を、オランダ人一行が江戸から引き揚げた後も、ひとりで続けていく自信を持っていたほどである。

トーサクは一六五五年一月に亡くなり<sup>(23)</sup>、彼が収集し、記録した資料はそのほとんどが一六五七年明暦の大火で焼失してしまつたようである。

### 特使フリシウスが持参した薬箱

すでに一六四〇年代には、商館長が医薬品を江戸へ持参することもあったので、井上や老中の屋敷にはある程度の西洋の「用常備薬」があつたはずである。これまでに老中が示した好意的な反応を忘れずに、特使フリシウスは一六四九年にも医薬品を持参しており、これは彼が乗ってきたロバイン号 (Robyn) の積荷送状 (factum) にも記載されている。最初の七九番の箱は老中用であつた<sup>(24)</sup>。

「Een casken No 79 daarinne de naarvolgende drogen  
ende medikamenten voore Rycx Raaden geeist

6 oncen Oxi. a 8 fl.'t lb.	3:-:-	(Oxymel simplex) <sup>(25)</sup>
4 oncen Succiny alby a 2 fl.'t lb.	-:10:-	(Succinum album)
1 lb. Balsamum Peruvianum	10:-:-	(Balsamus Peruvianus)
1 1/2 lb. Mumia a 36 stuyvs.'t lb.	2:14:-	(Mumia)
4 lb. Olium Therepentine a 6 stfs.	1:4:-」	(Oleum Terebinthinae)

第四番の箱は献上用で、その後、井上の手に渡つた。

「Een Casken No 4 daarinne de naarvolgende medicinen  
volgens de beschryvinge daarin seggende te weten

A 2 lb. Theriacae a f. 5't lb.	10:-:-	(Theriaca)
B 2 lb. Medridatum a f. 4	8:-:-	(Mithridatum)
C 2 lb. Confectio Hyacintex	24:-:-	(Confectio Hyacintex)
D 2 lb. Confectio Alcermis	30:-:-	(Confectio Alkermes)
E 3 lb. 4 oncen Aqua Vita Matiolia	11:2:-	(Aqua Vitae Mathioli)
F 2 1/2 lb. Balsamum Hyperici	7:4:-	(Balsamus Hyperici)
G 2 lb. Defencium Vigones	2:8:-	(Defensivum Vigoni)
H 2 oncen Resina Jalappae a f. 5	10:-:-	(Resina Jalappae)
I 1/4 lb. Rad. Mechoacannae	-:9:-	(Radix Mechoacannae)

K	1 1/4 lb. Salsaparilla a f. 6	9:-:-	(Radix Salsaparilla)
L	1/4 lb. Rad. Contrayervae	-:12:-	(Radix Contrayervae)
M	1 1/4 lb. Lignum Nephriticum	3:-:-	(Lignum Nephriticum)
N	6 oncen Cristalli Tartari	-:18.12	(Cristalli Tartari)
O	6 lb. Munnia a 24 stfs.	7:4:-	(Munnia)
P	1/4 lb. Peoms	-:12:-	(Paeonia)
Q	1/4 lb. Therebentina Veneta	1:4:-	(Terebintina Veneta)
R	1 Meremins Ribbe	9:4:- <sup>(26)</sup>	(peixe mulher)

シャムベルゲルはこれらの薬品については江戸で詳細な説明を行っている。

### 一六五〇年四月一六日～一〇月一五日の活動

フリシウス一行は一六五〇年四月中旬に長崎へ帰った。江戸に留まった四名のうちの代表者バイレフェルトが書いた日誌はその行方が不明であるが、この六ヶ月間の「金銭出納簿」<sup>(27)</sup>からはシャムベルゲルらの行動をいくらか推察することができるとが。バイレフェルトは魚、野菜、鶏、雉、薪、パン等の買い物を毎日綿密に記録し、その他の費用は月末に清算している。四月、使節団が発った直後、シャムベルゲルは頻繁に外出している。

「通詞や役人、外科医をさまざまな病人のもとへ運んで治療等を施すため、この半月毎日外出したので、一七日間の駕籠代は全部で二フロリン九スタイファー三ペニングになる」<sup>(28)</sup>。

その後は白砲手らも多忙になったため、シャムベルゲルの分は確定できなくなるが、七月まではシャムベルゲルが常に外出者リストの筆頭に書かれている。五月には全部で四三日分、六月には五九日、七月には七四日、八月には二二三



日、そして九月には一九四日分を支払っている。<sup>(29)</sup>

シヤムベルゲルが多忙な日々を送ったことは、バイレフェルトが江戸から長崎へ送った手紙からもうかがえる。

江戸（バイレフェルト） 長崎出島（ブロウクホルスト） （出典）

六月七日 ↓ 七月二七日 (ARA, NFJ 283)

六月二七日 ↓ 七月一〇日 (ARA, NFJ 283)

七月二四日? ↑ 七月一日 (ARA, NFJ 484)

? ↓ 八月一五日 (商館長日誌により)

七月一七日 ↓ 七月三〇日 (商館長日誌により)

八月一七日 ↑ 八月三日 (ARA, NFJ 484)

九月四日 ↓ 九月二三日 (ARA, NFJ 283)

? ↑ 九月二四日 (商館長日誌により)

? ↓ 一〇月四日 (商館長日誌により)

? ↑ 一〇月七日 (商館長日誌により)

最初の手紙は一六五〇年六月七日付で、特にシヤムベルゲルが毎日、「身分の高い人から低い人まで」さまざまな患者の治療に当たり、江戸の店にも井上の手元にもない薬品が若干必要になったため、同封のリストのものを早く送るよう依頼している様子<sup>(30)</sup>がうかがえる。自分用の薬箱を四箱持っていたシヤムベルゲルは、医薬品を大量に使用していたに違いないのである。

六月二七日に出した二通目の書翰も同様の内容である。これはたまたま江戸から帰途に着いた長崎の町年寄高島が預かった最初の手紙よりも早く七月一〇日にはブロウクホルストの手もとに届いており、翌日には希望の薬品に添書を添

えて発送している。

七月二八日と三〇日には出島に、同月一七日付のバイレフェルトの手紙と薬品、及び井上のためにオランダから取り寄せる珍品のリストが届いている。その返信の中でプロウクホルストは、帰郷したいという四人に辛抱するよう励まし、井上から外科学や測量術、臼砲について尋ねられるようなことがあれば、できる限り答えてはよいが、自ら進んで話すようなことがないよう改めて指示している。幸い將軍が四人の生活費を引き受けており、彼らは街中をかなり自由に行動することができた。通詞の猪股については、商人気質だとか、信頼できないなどと繰り返しオランダ語の書類に苦情が述べられているが、彼はシャムベルゲルのもとに自分から患者を連れてきていた。バイレフェルトは、このような患者をどうすべきか上司プロウクホルストに問い合わせている。プロウクホルストは、通詞が「治療不可能な身体障害者 (verninkte ofte lamme) を連れてきたら」、カスパル先生は、不治の病いだと言つて断つてもよいと返事している。「このとんま」、つまり猪股は嫌われ者であった。「例の通り上役にへつらうことばかりを考えているような者であったから」である。<sup>(31)</sup>

ちょうどこの頃、プロウクホルストはバイレフェルトに手紙を一通書いているが、現在、その所在はわかっていない。七月末に注文の医薬品が到着している。包みを解くと、「運送中の不注意から油の瓶がほとんど割れてしまっていた」。プロウクホルストは新たに荷造りをし直し、これは八月末にシャムベルゲルの手に渡ったものと考えられる、次に江戸から届いた、九月四日付の長い手紙には主に臼砲手スヘーデルの活動が記されていた。その内容は八月末から九月初めにかけて老中牧野と大目付井上の臨席のもとに行われた臼砲射撃に関するものであった。この手紙に対するプロウクホルストの反応は記されていない。それはバイレフェルトが江戸から出した一〇月四日付の手紙や、同封した日記の一部からもわからない。プロウクホルストは雰囲気は総じて友好的だったとだけ述べている。また、オランダ人たちは、かなり自由に町中を出歩いていた。

プロウクホルストの最後の手紙は一〇月七日付で、それが届いたのはバイレフェルト一行が江戸と大阪の間にいるときであった。江戸に残った四人は、次に商館長が江戸へ来るときまで帰れないだろうと思っていたが、急に帰郷の許可が下り、一〇月一五日に江戸を出発している。

その前日バイレフェルトはこれまで数ヶ月間のいろいろな支出を金銭出納簿にまとめているが、その中にはシャムベルゲルが購入した分も含まれていた。

「aen de volgende droguen als andersints door den chirurgyn

in 't bereyden sommiger medicynen tot geryf van de

gerecommandeerde patienten gedurende ons aanwesen in Jedo

verbruycken, namentlyck

voor droge kruyden, worttels ende zaaden

3 gantangh liqueren arack

gироeffel nagelen

wit ende geel waxc

quick silver

swavel ende lootwit

walvis been

31/2 @ Iywaat tot pleysters ende windels

eenige aerde flessen, kopiens, pottiens ende vuysters

1 keteltje ende 1 sits

Th:2:6:7:

-:7:-:

-:3:-:

1:5:-:

-:7:5:

-:2:9:

-:3:1:

1:5:2:

1:4:4:

-:3:1:]

(薬用の草、根、種)

(アラキ酒)

(丁子)

(白蠟、黄蠟)

(水銀)

(硫黄、白鉛)

(鯨骨)

(膏薬と包帯用の綿布)

(陶製の瓶、碗、鉢、乳鉢)

(やかん、インドサラサ)<sup>(32)</sup>

これによつて軟膏と膏藥の典型的な材料や、また鯨骨が骨折の副木に用いられていたことなどがわかる。

シャムベルゲルのこのような功績にもかかわらず、江戸に残ったヨーロッパ人四人のうち最も重要な役割を演じたのはスヘーデルだった。八月と九月に射撃を披露した後、一〇月初めに帰郷の許可が下りた。彼等の働きに対して上司であるバイレフェルトは小袖二〇枚、スヘーデルはスホイト銀百枚、シャムベルゲルはスホイト銀三〇枚、そしてスミト伍長はスホイト銀二〇枚を得た。<sup>(33)</sup>

バイレフェルト一行は一〇月一五日に江戸を発ち、陸路大坂まで行き、兵庫からは船で直接長崎へ向かい、十一月一日出島に到着した。彼等とはりわけ井上からさらに新たな注文を受けており、その中には若干の瀉血用硝子器や説明書付の解剖書もあつた。<sup>(34)</sup> ちなみに、それより少し前の、十一月五日には、帰化人沢野忠庵が死去している。<sup>(35)</sup>

### 一六五一年における活動

一六五〇年十一月一四日によく長崎へ戻つたシャムベルゲルは、早くも一〇日後には再び江戸へ発つことになつていた。<sup>(36)</sup> 今回は新商館長ピーテル・ステルテミウス (Peter Stentenius) に同行し、一六五一年一月五日に一行は江戸に到着した。ステルテミウスはすぐに通詞を大目付井上のもとにやり、「この間までこちらにいた外科医が来ている」とを告げると、シャムベルゲルは翌朝招待を受けた。念のため「閣下」は後で長崎屋に書状を送りさえしている。<sup>(37)</sup> 井上の希望通りにシャムベルゲルは日の出の一時間後に彼の屋敷へ向かつた。彼は上機嫌でシャムベルゲルに、東インドの他の地域にも赴任したことがあるのか、ポルトガル語はできるのか、どのような薬品を持ってきたのかなど、矢継ぎ早に質問を浴びせた。<sup>(38)</sup>

一月八日に再びステルテミウスは商務員二名とシャムベルゲルを井上の所へ同伴した。最後にシャムベルゲルはひとり残つて、外科学に関するさまざまな質問に答えなければならなかつた。<sup>(39)</sup> 翌日シャムベルゲルは井上の屋敷で、持参し

た薬品をひととおり見せなければならなかった。名称は通詞により日本字で書き留められた。筑後殿は、「これらの薬品はオランダ人の名で上様に献上されるであろう、オランダ薬はこれまでも度々用いられ、その効果が認められており、今後、日本では一層評価されるであろう」とシヤムベルゲルに対して表明している<sup>(40)</sup>。

前年同様、井上は商館長一行が持参した牛黄を老中に配らせた<sup>(41)</sup>。井上の要請に応じてシヤムベルゲルは一月の間ほとんど毎日患者を診て回った<sup>(42)</sup>。二月にもこのような往診は続いている。一九日に井上は通詞の孫兵衛に向かつて、「今年オランダ人が持参した珍品の中にある医薬品は特に評判がよく、外科医（シヤムベルゲル）が毎日行なっている善い治療は非常に喜ばしいことだ」と言っている<sup>(43)</sup>。

シヤムベルゲルは井上の屋敷を度々訪れていたようである。三月初めにステルテミウスは、シヤムベルゲルが井上の通詞から謁見の期日について情報を得たと記している<sup>(44)</sup>ので、おそらくシヤムベルゲルもポルトガル語がわかったのであろう<sup>(44)</sup>。

謁見は三月二四日に行われた。井上は四月一日に出発の準備に取りかかっていた一行に、翌年のために將軍と老中が希望する品物のリストを手渡している<sup>(45)</sup>。

この二度目の江戸参府から出島へ戻ってきたのは一六五一年五月三日であった。日本を離れるまでの残りの六ヶ月間についての記述はごくわずかである。六月の初めに江戸から再び井上の注文が届いた。多くの医薬品のうち、出島にあるものはすぐに発送しているが、これはシヤムベルゲルが行ったに違いない。残りは翌年の分となった<sup>(46)</sup>。

古賀十二郎はヴァレンタイン (François Valentyn) を引用して、シヤムベルゲルが一六五〇年一二月に、奉行から、雌の獵犬が子犬を産んでから弱っている<sup>(47)</sup>ので治療するよう要請されたことや、また、猿が一週間前に尾を焦がしたと運び込まれ、治療しなければならなかったことなどを指摘している<sup>(47)</sup>。このエピソードは両方とも事実ではあるが、シヤムベルゲルがいた時期ではなく、一六五六年の出来事である<sup>(48)</sup>。

一六五一年八月三日に上位外科医ヨーハン・ヤーコプ・メルクライン (Johann Jacob Mercklein) が乗っていたポーランド王号が入港した<sup>(49)</sup>。長崎湾に停泊している間に日本人「貴族」が熱いピッチで足に火傷を負った。シャムベルゲルは毎日その傷を診ていたが、ひとりでは手に負えないと思ったのであろう、オランダ船の外科医を次々に連れてきた。彼は褒美として着物や酒、金貨などを貰った。こうして幸運にも街を見る機会に恵まれた者の中に既述のメルクラインがいた<sup>(50)</sup>。この火傷は実際ひどかったようで、シャムベルゲルの後任者も診療に関わっている。一二月初めに奉行は商館長ファン・デル・ブルフ (Adriaen van der Burgh) に鴨を数羽贈り、外科医に、足に重い火傷を負ったボンジョイの治療を許可したことに感謝の意を表している<sup>(51)</sup>。この頃シャムベルゲルは、一月一日、ポーランド王号で日本を離れ<sup>(52)</sup>、バタヴィアから一週間足らずのところをいた。

### 一六四九年から一六五一年に行つた医薬品の注文

この時期に井上が注文したものは、後の納品から一部を再現することができる。一六五一年四月一日に將軍と老中が希望する品物のリストを手渡している<sup>(53)</sup>。この注文書はオランダ船で秋にバタヴィアに着いた。そこで手に入るものは翌夏は届けることができたが、オランダから送らせたものは早くても二年先になった。そのため、次の一六五二年夏のシメント号 (Sniendt) 七二番の箱に含まれていた故尾張藩主の子息たちのためのミイラ、筑後殿のための包帯缶、ランセツト、用具、本などにはシャムベルゲルの影響が明らかに認められる<sup>(54)</sup>。

[Een Case No 72 darynne

1 Catty Momie voor de kinderen van den overleden H[ee]r van Onwary 3:-:-

2 chirurgyns verbind doosen mit koper beslagh met hun vlymen en

gereetschap voordien Commissaris Sickingod[onn]o

19:-:-

(…)

Een Herbarius van Dodoneus affesete voor d'H[ee]r Sickingodonne

120:--

Een Historie Naturalis voor idem

52:--]

ドドネウスの本草書がこれ程早くも日本に届いているのは注目に値する。もう一冊は、一六四八年にアムステルダムでヴィレム・ピソ (Willem Piso) によつて出版されたゲオルグ・マルクグラフ (Georg Markgraf) のもので、*Historia rerum naturalium Brasiliae libri VIII* を指している。

商館の仕訳帳 (Journal van de negotie) にも着荷が記録されており、発送側より正確な場合もある。ここには書物、上記の包帯缶や「よく蒸留した水類」つまり蒸留酒類が見られる。さらに注目すべきものは、「オランダから日本へ至急便で発送されたいろいろな医薬品を詰めた大きな箱」で、この箱については内容の目録が作られている。<sup>(55)</sup>

「Een groote kist met diverse medicamenten en

droguen, expres uyt Nederlandt vor Japan

gesonden, compt te costen 320:18:-

Een Cassen daerin

2 lb. Olium Vitrioly (Oleum Vitrioli)

2 lb. Olium Sulpheris (Oleum Sulphuris)

2 lb. Olium Succeny (Oleum Succini)

2 lb. Spiritus Vitrioly (Spiritus Vitrioli)

6 lb. Semen Anisy (Semen Anisi)

6 lb. Semen Cominy (Semen Cumini)

3 lb. Radix Jreidis	(Radix Iridis)
1 lb. Crocus Orientalis	(Crocus Orientalis)
6 lb. Radix Caliny	(Radix Carlinae)
2 lb. Spiritus Sulphuris	(Spiritus Sulphuris)
1 lb. Unguentum Martiatum	(Unguentum Martiatum)
1 lb. Unguentum Nervinum	(Unguentum Nervinum)
kosten t'zamen	56:6-」

時には輸送中に荷物が分散してしまうこともあり、そのため売っても損失を出すことがあったし、まったく売り物にならないこともあった。そのような場合は、商館の仕訳帳に明細が残っている。一六五二年にはスミント号が運んできた薬品の一部が腐ったり、瓶から漏れたりしており、出島へ再び補充しなければならなかった。<sup>(96)</sup>

「5 lb. Theriaces Andromachi a 4 fl. t. lb.                    16:-- (Theriaca Andromachi)

4 lb. conserve van Roosen a 24 stuyvs. t. lb.	4:16:-	(Conserva Rosarum)
4 lb. Populeum a 24 stuyvs. t. lb.	2:8:-	(Unguentum Populeum)
4 lb. Lynzaet Olye a 4 stuyvs. t. lb.	--:16:-	(Oleum Lini)
4 oncen Ol. Carui a 6 fl. t. lb.	1:10:-	(Oleum Carui)
3 oncen Ol. Foeniculi a 20 fl. t. lb.	2:5:-	(Oleum Foeniculi)
4 lb. Card. Benedictice waser a 4 stuyvs. t. lb	--:16:-」	(Aqua Cardui Benedicti)

この荷もシャムベルゲルの日本滞在中に依頼されたものに違いない。

同年、医薬品を詰めた大きな箱がもう一つバタヴィアから長崎へ送られている。<sup>(97)</sup>



## 一六五二年春の医術関係の注文

シヤムベルゲルの後任として一六五一年一月四日出島に就任したドイツ・エアフルト出身のヨハネス・ウンシュ(Johannes Wunsch)も<sup>(58)</sup>三ヶ月半後には江戸にある井上の屋敷に招かれたが、特に目立つような活動は見受けられない。井上の方は商館長一行が出発する前日、一六五二年二月二四日に長いリストを託した。そこに見られる治療薬、道具などの要望は極めて精確で、シヤムベルゲルのその後の関心のほどがうかがえる。ミイラ、ビリリ、犀角、眼鏡、書見用眼鏡、外科用の吸角、外科用包帯と軟膏の小さな缶、人魚の骨、象の脂、象の瘤腫、授乳期の婦人が首に付ける乳石、止血に用いる血石、義手四本、義足二本、犀の脂、室内用の寒暖計、「硫酸、硝酸、酒精などを蒸留するための蓋付の蒸留器」や「銅、木、その他の材料で模造し、人体のあらゆる部所、手足、内臓などをできるだけ詳細に見ることができ、人体模型」など<sup>(59)</sup>。

ガラス製の吸角はシヤムベルゲルがいる間にすでに要望が出されていた。一六五二年夏に届いた瀉血針は同じく前年のうちに注文されたものだろう<sup>(60)</sup>。また蒸留フラスコを要望していることから、膏薬や軟膏を作る際に欠かせない種々の材料を江戸で作ろうと考えていたことが分かる。

### シヤムベルゲルが江戸で用いた書物について

そもそも、キリスト教関係書の密輸入を防ぐために書籍は輸入禁止だった。しかし、すでに一六四一年一〇月には、商館長ル・メール(Le Maire)に、薬学、外科学、航海術の書は例外だと口頭で伝えられている<sup>(61)</sup>。このことは、一六五一年長崎に来た薬剤師兼外科医だったヨーハン・ヤーコブ・メルクラインも証明している。

「こうして船の到着の時に、直ちにオランダの書物を調べ、その挿絵にもよく注意を払っていた検使たちは、特に外

科と薬草に関する医学書はその場ですぐに返してくれる。これはおそらくこの術に対する特別な好意からであろう。しかし、そのために増長してはならない、という条件つきではあるか。<sup>(52)</sup>」

ヨーロッパの都市の理髪外科医は職場としての店を持っていたが、出島商館にも主な薬品、道具などと共に医学、薬学関係の書物を備えた小部屋があった。その上さらに、来日する外科医は自分が所持する外科箱や個人的な本、処方メモなどを持参していた。バイレフェルトがプロウクホルストに出した書簡から、井上の問いに答えるためにシャムベルゲルが出島から書物を送らせていたことが分かるが、その点は注目に値する。<sup>(63)</sup> 個々の書名についてはどこにも記されていないが、ある程度の推測は可能である。

井上が解剖書を一六五〇年夏と、一六五二年春の二度注文していることを考えると、おそらく、出島から江戸へ送られた本の中には解剖学の書も含まれていたであろう。もしかするとそれはアンドレアス・ヴェサリウスの解剖書 *De humani corporis fabrica* であつたかも知れない。江戸にはポルトガル語の通詞しかいなかったため、一六五二年には、この書がポルトガル語であることが要望された。

同様に「生態の絵入りの本草書」のポルトガル語版が注文されている。それは、紅毛流処方西洋の名称で記載されている薬草を理解し、日本でも似たような植物を見つけるためのものであつたようである。

さらに井上は、上ですでに述べたように一六五二年には義手と義足を二本ずつ注文しており、その機能については以下のように指定している。<sup>(65)</sup>

「一鉄製の義手四本とねじ。刀で戦う際や筆で字を書くときに付けて使用する。左右二本ずつ。一方の組が高価で変わっている。

一同様に作られた義足二本。上記と同様、足をなくした場合（またはむしろ好奇心から）用いる」。

これは間違いなく義手と義足の銅版画つきのアンブローズ・パレの著名な「外科学」二三巻、一一、一二章（欠陥の

補充について<sup>(66)</sup>」から思いついたものであろう。

江戸でシヤムベルゲルが説明した膏薬や軟膏の処方は、その大部分が一六三六年か一六三九年のアムステルダム薬局方に拠るものである。ヤン・スティペル (Jan Stipel)<sup>(67)</sup> も一六五三年一月にこの本を使って処方の説明している。同年一月一四日の夕方、通詞の孫兵衛が来て、奉行甲斐庄喜右衛門のために「調合薬数種を書き留めた。鎮静用の軟膏と膏薬で、このためにスティペルが呼ばれた」と記されている。スティペルは「簡単なものから説明を始め」、ごくわずかの種類で作ることができ、日本で材料が手に入り、「アムステルダム薬局方に記載されている」処方を紹介している。<sup>(68)</sup> この本は間違いないく出島の本棚にあったものである。

## 文献

- (1) 出島商館日誌 (Dagregister, 以下 DD) などの資料はオランダの国立中央図書館の出島商館伝来文書 (ARA 1.04.21, Nederlandse Factorij Japan, 以下 NFJ) にある。同文書館の東インド会社一般関係の文書 (ARA 1.04.02 Verenigde Oostindische Compagnie, 以下 VOC) にも日本に関する文献が含まれている。
- (2) NFJ 63, DD 7.11.1649
- (3) ヴォルフガング・ミヒェル「出島蘭館医カスパル・シヤムベルゲルの生涯について」『日本医史学雑誌』三六卷三号、二〇一〇頁、一九九〇年 (平成二年)  
ヴォルフガング・ミヒェル「カスパル・シヤムベルゲルの「吊辞」について」『日本医史学雑誌』三七卷四号、一四三〜一五一頁、一九九一年 (平成三年)
- (4) NFJ 63, DD 22.1.1650
- (5) プロウクホルストの記述は出島商館日誌に見られる (NFJ 63)。フリシウスの旅行日誌の写しはバタビアからオランダの Heren XVII へ送られた。VOC 1176 参照。

- (6) NFJ 63, DD 10.2.1650
- (7) VOC 1176, p.610
- (8) 「阿蘭陀外科医方秘伝」(佐藤文彦蔵書)。宗田一「日本の売薬(二七)ーオランダ膏薬・カスパル十七方」『医薬ジャーナル』一四巻五号、一一三〜一一九頁、一九七八年(昭和五三年)、宗田一「カスパルの江戸での伝習についてー阿蘭陀外科医方秘伝の紹介」『日本医史学雑誌』二六巻三号、九七〜九八頁参照。
- (9) オランダ語 vos (狐)
- (10) 「阿蘭陀外科医方秘伝」、七七頁
- (11) オランダ語 boter (バター)
- (12) 「阿蘭陀外科医方秘伝」、七七〜七八頁
- (13) 加須波留秘方並諸家方(成田図書館、千葉県成田市、ろ一七五八〇一七)、二九頁
- (14) NFJ 79, DD 8.1.1666: Zuwan (alias Jan Schram)
- (15) NFJ 1668 (rekening, 13.2.1650)
- (16) Emplastrum Melioli; Emplastrum Santalinum, Emplastrum Mucilagibus
- (17) 「阿蘭陀外科医方秘伝」、七六〜七七頁
- (18) NFJ 66, DD 16.1.1653 及び NFJ 69, DD 8.2.1656, 21.2.1656 参照
- (19) 井上の病気につては NFJ 67, DD 17.2.1654, 10.3.1654 及び NFJ 68, DD 3.2.1655 参照。また、井上については、永積洋子「オランダ人の保護者としての井上筑後守政重」『日本歴史』三二七号、一〜一七頁、一九七五年(昭和五〇年)参照。
- (20) NFJ 66, DD 29.1.1653
- (21) 「阿蘭陀外科医方秘伝」、七八〜七九頁
- (22) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第三輯、一五〇〜一五一頁(二六五二年五月二四日)、岩波書店、東京一九五八年(昭和三十三年)

- (23) NFJ 69, DD 12.11.1655
- (24) NFJ 773 (factuur, Casteel Baravia, 27.7.1649, Robym)
- (25) 値段は florin, stuiver, penning とぶら単位で表示されている。例えば、10:3:1は一〇フロリン、三スタイファー、一ペニングである。
- (26) カリブの海牛 (Trichechus manatus manatus) とマンブーンの海牛 (Trichechus manatus inunguis) 西アフリカの海牛 (Trichechus manatus senegalensis) を区別している。一七世紀の有名な百科事典 Zedler (Vol. 20, p. 189) によれば、雄の頭から、脳を分ける骨を取り出した。ワインにつけて刻むと石に効くとされていた。ポルトガル人はその骨を伝染病よけのため首に下げる。肋骨、特に左側の心臓に近い部分は血を止め、痔に効くとされていた。
- (27) ヴォルフガング・ミヒェル『Willem Bijleveltの金銭出納簿』『洋学史研究』一〇号、三八〜八一頁、一九九三年(平成五年)
- (28) NFJ 1168 (rekening, 30.4.1650) 前掲文献 (一一) 参照。
- (29) NFJ 1168 (rekening, 30.4.1650, 31.5.1650, 30.6.1650, 31.7.1650, 31.8.1650, 30.9.1650)
- (30) NFJ 1168 (rekening, fol.10b)
- (31) NFJ 484
- (32) NFJ 1168 (rekening, fol.10b)
- (33) NFJ 64, DD 14.11.1650
- (34) NFJ 64, DD 14.11.1650
- (35) NFJ 63, DD 6.11.1650
- (36) NFJ 1168 (rekening, fol.10b, 12b)
- (37) NFJ 64, DD 5.1.1651
- (38) NFJ 64, DD 6.1.1651
- (39) NFJ 64, DD 8.1.1651

- (40) NfJ 64, DD 9.1.1651
- (41) NfJ 64, DD 15.1.1651
- (42) NfJ 64, DD 29.1.1651
- (43) NfJ 64, DD 19.2.1651
- (44) NfJ 64, DD 6.3.1651
- (45) NfJ 64, DD 1.4.1651
- (46) NfJ 64, DD 1.4.1651
- (47) 古賀十二郎『西洋医学伝来史』六六～六八頁、日新書院、一九四三年(昭和一八年)
- (48) NfJ 70, DD 7.12.1656, 13.12.1656
- (49) NfJ 64, DD 1.4.1651
- (50) Christoph Arnold: Wahrhaftige Beschreibung [n] dreyer mächtigen Königreiche, Japan, Siam, und Korea [...] Nürnberg 1672, シュトル (一九九〇年) 参照。
- (51) NfJ 65, DD 6.12.1651
- (52) NfJ 64, DD 1.11.1651
- (53) NfJ 64, DD 3.8.1651
- (54) NfJ 776 (factuur, Casteel Batavia, Smient, 11.7.1652)
- (55) NfJ 851 (journal, 9.8.1652)
- (56) NfJ 851 (journal, 4.11.1652)
- (57) NfJ 851 (journal, 1.11.1652)
- (58) ヴンシュはドイツのエアフルト (Erfurt) で生まれた。一六四七年にクー号 (Koe) で下級外科医として月給二六ギルダでバタビアへ来た。そこで始めは上級外科医の監督下で皆で働き、後にいろいろな船の上級外科医になった。一六五一年一〇月六日に出島商館長ステルテムィウスにより上級外科医として新たに三年の契約を結んだ。(NfJ 5, fol. 45, 60) 彼の

- 名前は「出島で一緒だったスウェーデン人オーロフ・ヴァルマン (Oloff Willmann) に現われぬ」。(En kort Beskrifning uppå Treme Resor och Peregrinationer / sampt Konungarijket Japan [...], Wriuszborg, 1674, p.194)
- その年の蘭館日誌には「外科医」としてしか記されていない。一六五四・五年には「heelm[eeeste]r Johannes Wunsch」が再び日本に現われる。彼は「商館長ヴァニックスによればすでに二度参府に同行していた」。(NFJ, DD 16.2.1655)
- (59) NFJ 65, DD 24.5.1652
- (60) NFJ 851 (4.11.1652)
- (61) NFJ 55, DD 31.10.1641
- (62) “So geben auch die jengen Aufseher (so die Holländischen Bücher / gleich bey der Ankunft der Schiffe / besichtigen / und auf die Figuren derselben genau acht haben) innen die Arzneybücher / welche sonderlich von der Chirurgie und Kräutern handeln / in der Stelle (und wie vernuthlich) aus sonderbarer Zuneigung gegen die jennige Kunst / wieder: Jedoch mit dem Beding / daß sie sich nicht groß damit machen / noch viel Ruhmens davon haben sollen.” Christoph Arnold (1672) , pp.343-344.
- (63) NFJ 283, (7.6.1650)
- (64) NFJ 63, DD 10.11.1650 及、NFJ 65, DD 24.5.1652
- (65) NFJ 65, DD 24.5.1652
- (66) 「欠陥の補足についで」(De Deficientium Supplemento)
- (67) ヨハネス・ステイベル(またはヤン・ステイベル)はオランダのユトレヒトで生まれた。彼は月給三四ギルダでヴィテン・オリファント号 (Witten Olifant) の下級外科医として一六五〇年一月にバタビアに着いた。最初は上級外科医として東南アジアの小島ソロールの「ヘンリクス要塞」(Fortresse Henricus)で働き、一六五二年には日本へ転勤してきて、(NFJ 5, fol.88b)。<sup>14</sup> 初年の商館長日誌には職業名 heelmeeester ではなく現われない。次の任期には一箇所で Chirurgyn Jan Stipel (NFJ 67, DD 13.2.1654) あとはすべて M[eeeste]r Jan Stipel となっている (NFJ 66, DD 27.1.1653, 4.2.1653, 6.2.1653, 27.2.1654, 7.3.1654, 16.3.1654)。<sup>15</sup> 彼の雇用契約は一六五三年で終わっていた。一六五四年一月一日には「前回江戸参府した

ことや満足できる立派な勤務ぶりから新たに上級外科医として認められている。昇給や任期については具体的な取り決めはなく、その後のことはすべてステイペルに任せられていた (Zenshi, 1988)。翌春にはウンシュが上級外科医として江戸へ赴いているので、ステイペルは一六五四年晩秋には日本を離れていたと考えられる。

(68) NFJ 67, DD 14.11.1654

(九州大学言語文化部)



# Caspar Schambergers Aktivitäten in Japan

Wolfgang MICHEL

Bislang waren einige wenige Einträge in den Faktoreitagebüchern von 1649 bis 1651 die einzigen Anhaltspunkte für die Aktivitäten des deutschen Barbierchirurgen Caspar Schamberger (1623-1706) in Japan. Durch die Erschließung neuer Quellen kann nun ein weitaus detaillierteres Bild gezeichnet werden. Besonders zu nennen ist (1) die Buchhaltung für die Gesandtschaftsreise nach Edo (25.11.1649-16.4.1650), (2) die Buchhaltung des Kaufmanns W.Bijlevelt für die Zeit vom 16.4.1650-15.10.1650, (3) der Briefwechsel zwischen Bijlevelt in Edo und dem Faktoreileiter A. Brouckhorst in Nagasaki für diesen Zeitraum, (4) die batavischen Fakturen der seinerzeit nach Japan auslaufenden Schiffe und (5) die in Privatbesitz befindliche japanische Handschrift 'Geheime Überlieferung von Rezepten der Holland-Chirurgie' (Oranda geka ihō hiden).

Aus diesen Quellen wurde deutlich, daß Schamberger 1650 in Edo nahezu täglich mit der Visite von Patienten beschäftigt war, zu denen der spätere Reichsrat Inaba Masanori gehörte, für den sogar Diagnose und Rezept erhalten sind. Gleiches gilt für einen Pagen, der einem Mitglied der kaiserlichen Familie diente. Erstmals vorgestellt wird weiter - als Patient und 'Schüler' Schambergers - der Leibarzt des Großinspektors Inoue Masashige, namens 'Tosaku'. Wir lernen zudem den Inhalt jener Arzneimittellisten kennen, welche die Gesandtschaft von Frisius nach Edo brachte, wie auch Einkäufe in Edo und

(27)

27

Bestellungen nach Dejima, zu denen Schamberger genötigt war, weil ihm die Heilmittel nach einiger Zeit ausgingen. Vor diesem Hintergrund werden einige Bestellungen durch Inoue vorgestellt und zum Schluß die medizinischen Fachbücher erörtert, die Schamberger bei sich führte.